

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	柘木 芳樹
論文担当者	主査 山本 新吾
	副査 藤盛 好啓
	副査 池内 浩基
学位論文名	Early Stage Clinical Characterization of Malignant Pleural Mesothelioma (早期悪性胸膜中皮腫の臨床徴候)
論文審査の結果の要旨	
<p>悪性胸膜中皮腫(MPM)は依然として極めて予後不良な疾患であり、診断後の生存期間中央値(MST)は約1年である。現状では化学療法に手術、術式に応じて放射線療法を併用した集学的治療が行われているが満足いく治療成績は得られていない。このような現状から現在実施可能な治療選択肢の中で、さらに良好な生存期間を得る最も現実的な方法として、現状より早期にMPMを診断し治療介入することと考え今回の研究が行われている。</p> <p>今回の検討ではより早期のMPMを同定するために、まずMPMの確定診断例において、IMIG分類で臨床病期がT0/1a/1bNOMOと胸膜病変が乏しい72例のうち、診断時にFDG-PETで有意なFDG集積(SUV\geq2.5)を認めた群(PET陽性群:32例)と、認めなかった群(PET陰性群:40例)とに層別し、全生存期間(OS)を比較した結果(OS中央値:陽性群26ヵ月、陰性群45ヵ月、P=0.2356)、有意差は認められなかったが、陰性群の方が長期生存である傾向を確認できたことから、PET陰性群40例を早期MPMと定義している。有意差がつかなかったものの、PET陰性群がより長期生存である傾向を報告したのは本検討が初めてであり、また早期MPMのMSTが45ヶ月と比較的良好であることが示されている。そしてその40例の患者背景(年齢、性別、アスベスト曝露歴の有無)、診断経緯、胸水細胞診、組織型、予後などの臨床徴候につき、後方視的に検討が行われている。その結果、早期MPMでも二相型が上皮型よりも予後が不良であること、胸水細胞診陰性群(classⅡ、classⅢ)が胸水細胞診陽性群(classⅣ、classⅤ)よりも予後が不良であること、EPP(Extrapleural Pneumonectomy 胸膜肺全摘術)施行群がEPP非施行群よりも予後が不良であることが同定された。また今回検討した40例中9例で胸水細胞診陰性でありながらMPMの確定診断が得られており、明らかな胸膜病変を認めなくとも、アスベスト曝露歴や胸水ヒアルロン酸高値などMPMを疑う因子がある場合は積極的な胸膜生検が推奨されること、ならびに40例全例に胸水貯留を認め、胸水貯留そのものが早期中皮腫のひとつの徴候であることが示された。</p> <p>上記の通り、早期MPMの臨床徴候を明らかにした本研究成果は学位授与に値すると評価した。</p>	